

# ほなひ歴史通信

第25号

2002.12.1

## 西金砂神社磯山大祭礼

西金砂神社は、大同元年（八〇六）、比叡山日吉山王権現を勧請して創建され、西金砂山王権現と呼ばれる。比叡山から海路により、水木浜（日立市）に上陸。久慈川・浅川沿いに西金砂山に鎮座した。その道筋を、小祭礼（6年ごと）の時は常陸太田市の馬場まで、大祭礼（72年ごと）の時は水木浜までの渡御が行われているが、第17回の大祭礼が来年の3月22日から28日まで執行される。

神社の創建について、「当時本国（常陸国）疾疫あり、近江国日吉権現を遷し祭る」とあり、祭神大己貴神（オオナムチノオオカミ）は医薬の神であるから、悪病を静めようとして建立した。さらに、諸沢村に千手観音堂を、赤土村に鐘楼と経堂を、中染村に十六羅漢堂を建立、鎮護国家の一大道場となった。

江戸時代には、代々の水戸藩主が尊崇し、特に大祭礼には、必ず代参を遣わした。徳川齊昭が社参した時には、「眺むれば 心の隅も 打ち晴るる さやかに匂ふ 遠の山の端」と詠んでいる。

水木浜へ浜降りするのは、潮（塩）水によってケガレを清めるため。病気も不作も社会不安もケガレによって引き起こされると考えられたので、清めることにより、健康で豊作、国家安泰になると信じられた。山は葬地であり、死穢にふれるところであった。そこで、清浄な地である海岸・湖岸・川に降りて清めを行った。

「金砂山由来記」には「神より大祭礼の宣旨をうけ、大祭礼の儀式を定め、三月朔日、水木浜に御出かけになり、御潮取りを執行して、天下泰平、五穀成就、万民豊樂のために御祈禱を行い、御神体が磯出なされる。竜神とお話しなされて、天笠の御使者や天地の鬼神の心を慰め、和らげる。また、竜神よりの使者は清魚を使わし、山王権現よりは猿を御使いとする。」とある。

なぜ、小祭礼が6年ごとの未年・丑年、大祭礼が72年ごとの未年なのか。これは陰陽五行説で、火気は未で衰える。水気も丑で衰える。農作物、ことに稲作には太陽（火気）と水が不可欠である。未年は太陽が衰えて冷害をもたらし、丑年には水気が衰えて旱魃となる。火気の衰える未年、火気の衰える丑年に、磯から汲んできた潮水で清め、その神威を高めることによって太陽も水も正順に恵まれるようにと祈ったのである。

約七百名の大行列を組み、6泊7日を要して、水木浜に磯出して、御神徳をひろめ、各地で田楽舞を奉奏するので大田楽とも呼ぶ。

田楽は平安時代より行われた民間の舞踊で田植えの時、笛や太鼓を鳴らして歌い舞ったもので、第5回目の磯出大祭礼から初めて行われたという。

その内容は、四方固め、獅子舞、種子蒔き、一本高足の四段で構成されている。

・四方固め——天照大神がニギニノミコトを降臨させた時に、猿田彦命が出迎えた場面の舞。

・獅子舞——出雲のスサノオノミコトの子の大国主命が慈愛と笑顔を以って、鈴に興しながら荒ぶる者共（獅子）を和める舞。

・種子蒔き（田作り）——五穀豊穣を祈って苗代の種子蒔きの舞、蓮葉笠をかぶった五人が舞、種子蒔き役が籽種子を蒔く。

・一本高足（高足力士）——常陸鹿島神宮のタケミカツチノミコトを出雲に派遣して大国主命に国土返上を承諾させる。タケミカツチノミコトが大任を全うして威風堂々と振る舞うところの舞。国家統一の喜びを表わした舞。

昭和6年の第16回大祭礼について、「のべ人員十数万（氏子関係者）、拝観者の総数数百万なるべし」と記録されている。（野内）

## 久慈川の漁(一)

大森政夫

大子町上小川地区の頃藤では、地元を流れる久慈川で古くから川魚の漁が行われてきた。その漁法は少しずつ変化しながらも現在に引き継がれてきたものもある。

終戦前後、小学生であった私はよく久慈川へ遊びに行った。

今の小学生は久慈川で遊ぶことを禁止されているが、当時の子供たちにとっては大事な遊び場の一つであった。

そのころの久慈川は今と違って水量が多く水も澄んでいた。川底は砂や大小の玉石を敷きつめたようで、川面から透かして魚影を見ることができた。また川岸から葦が繁茂している現在とは異なり、川原には洗われた砂や砂利、玉石がゴロゴロしていた。川原から二〇〜五〇メートルへだてた所から草むらとなるため、ここは子供たちの格好な遊び場であった。久慈川では泳ぐことばかりでなく、釣りや草野球など四季を通じてさまざまな遊びが待っていた。

そのころ私は、久慈川で漁をする人達をよく見かけた。夏は久慈川の流れに腰までつかり釣り糸を垂れる人、笹舟に乗り右腕に投網をかけ左手で自在に舟を操る人、春や秋には、ひとかえりもある自製のウツボを引き上げてカニを捕る人、冬になると、笹舟にはいつくばって水鏡で川底をのぞき、流れに任せてヤスを構えている人等々、遊びながらも様々な漁を見掛けたものである。後で知ったのであるが、この人達は久慈川での漁を生業にしていた同じ頃藤に住む人達であった。

この時私は、漁法の一つであった「引っかけ漁」を見て、泳ぎながら鮎を引っかける早業にいたく感動したことがある。しかし、残念ながら現在では見られなくなってしまった。

久慈川の漁法について私には、断片的な記憶しかないのか、かつて漁を生業とされていた一人である和田朝さん(八十歳)にお話を伺う機会を得た。和田さんは頃藤仲沢の生まれ、ズーと長いこと久慈川で漁を行ってこられた方である。

和田さんが最も盛んに漁を行ったのは、昭和二十年頃から三十年代というから、前述のように、私が久慈川で遊びながら漁を見ていた時、和田さんは漁をしていたということになる。

久慈川での漁の共通した醍醐味は、今も昔も変わらない鮎の友釣ではなからうか。したがって、友釣は誰もが知っていると思われるので、本稿では他の漁法について書くことにしたい。

久慈川で漁の対象とした魚には、当時地元の人達が使っていた呼び名で記すと、アユ(鮎)、アイソ(ウグイ)、ヒガイ(ヤマベ)、コイ(鯉)、ウナギ(鰻)、サイ(ニゴイ)、バカゾ、ギバチ(ギン魚)、ナマズ、カジカ等のほかにカニ(モズクガニ)である。これらの魚を捕るにはそれぞれ漁期があり、また魚の種類や習性によって漁法も異なっている。これらの知識があるかどうかで、漁獲量も違ってくる。(以下、各種の漁法について述べてみたい)

### ▼引っかけ漁

この漁は夏の暑い日に、水鏡(流しめがね)をつけて早瀬を泳ぎながら、水中に群れる鮎を針で引っかけて捕る方法である。

この時使う漁具は、木製の「箱型水鏡」と釣針を錨型に結び竿の先端につけた「引っかけ竿」である。(次頁図参照)

水鏡は顔がすっぽり入る大きさで、底部がガラス張りになっている。泳ぎながら使用するのでアゴ当てが付いてあり、鏡の内部に水が入らないよう工夫してある。また箱のなかには横棒があつて、これをくわえて固定するので両手が自由に使える。

引っかけ竿は、使いやすいうように自分で作る。手に持つ竹竿の先に自転車のスポークを差し込み、先端に釣針が差し込める

ような細く短かい竹筒を付ける。竿の先にスポークを使うのは水の抵抗をやわらげ、ある程度の重さによって水中でも動きやすくするためである。

釣針は錨型にテングス系で結び、糸の一方を切らずに長いままにしておく。このが漁のとき重要な役割を果たすのである。錨型に結んだ釣針は、スポークの先端に付けた筒竹に差し込むとテングス糸は長く伸びたままとなる。漁場では右手に引っかけ竿を持ち、自分の小指にテングス糸の端を結び付ける。

このようにして水鏡で水中を覗くと、光を通した川底は明るく、鮎が群れている様子が見られる。鮎は川底の石についている苔を餌として、通常十匹位が群れをつくっているという。もちろん、石が大きければ付着している苔も多いので鮎の群れも大きくなる。鮎はこの石をテリトリーとして群れて活動しているのである。群れのなかには上下関係があるようで、一番大きな鮎が全ての主導権を握っている。以下、小ささまざまな鮎がテリトリーを守るため、それぞれの活動をしている様子が見られる。また、外敵が近づくとすばしっこく追い払う役目の鮎がいたり、じつと餌の順番を待っているのんびり型の鮎もいて、どこか人間社会と似ているともいう。

水鏡の中に顔を突っ込んで、引っかけ竿を持ち、泳ぎながら瀬を下り、石に群れる鮎を瞬時に引っかけるのであるが、この時主導権を握っている大鮎をねらう。鮎を引っかけると、スポークの先端から釣針が離れる。鮎に突き刺さった釣針は、テングス糸に支えられながら流れを五〇メートル位下り、鮎の抵抗が徐々に弱まるのを待って捕まえる。もしたらまたもとの上流に戻って繰り返し漁を行う。引っかけた鮎は、一時水鏡の中に入れておく。何しろ泳ぎながら、素早く泳ぐ鮎を引っかけ捕まえるのであるから、驚くべき早業である。

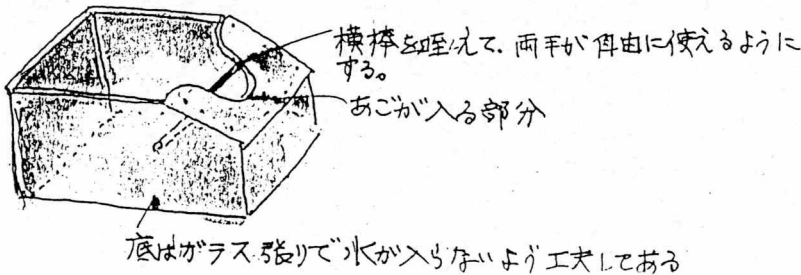
こうして捕った大型の鮎を水鏡の中で見せてもらったことがある。その鮎は、当然のことながら、背や腹に針で引き裂いた傷が生々しく残っていたのを今でも思い出す。(つづく)

## 《ひっかけ漁の用具》

### 《ひっかけ竿》



### 《ひっかけ用流し水鏡(本製)》



# 故里、八溝山と『校歌』

飯村 尋道

一、はじめに

青雲の志を抱いて上京した青春時代。帰郷ほど胸の躍ることとはありませんでした。下宿先の世田谷の北沢から新宿に出て、山の手線を上野駅に降り、十八番ホームに入ると、石川啄木の詠んだ「故里の、訛なつかし停車場の、人ごみの中にそれを聴きにゆく」の歌や、井沢八郎の歌った「ああ上野駅」が頭をよぎり、田舎で待っている母の笑顔が目に見えかかってくるものでした。

故里、大子に直行する準急『奥久慈』に乗車。山方宿を過ぎたあたりから、久慈川に添った山あいの溪谷をさかのぼると、いよいよ故里の匂いがして「汽車の窓、はるかに北にふるさとの、山見え来れば襟を正すも」(啄木)の心境になりました。

八溝山麓の中郷で子供時代を過ごした私にとって、大子の松沼あたりの車窓から見える八溝山や高笹山、太神宮山などのたおやかな山容は、今も心の拠り所として、常になぐさめられ勇気づけられています。

故里の母なる山として、八溝山は多くの校歌にも歌い継がれてきました。

## 黒沢小学校校歌

作詞 佐々木信綱  
作曲 田村虎蔵

高笹の山 嶺秀いで 八溝の川の水清く  
林にしげき杉木立ち 田畑に実るたなつもの

校歌は、卒業して何十年経ても不思議と歌詞を忘れることありません。むしろ、新鮮によみがえってきます。他のこ

とは忘れても校歌だけは忘れません。校歌を歌うことによつて、恩師や友の懐かしい顔が、そして故里の山河を遊び場として駆けめぐるた貧しくも楽しかった子供の頃の思い出が、走馬灯のように浮かんできます。

故里の近くにいる私でさえこうなのですから、いわんや、故里をあとに遠く離れた異郷の地にいる方々の思いは、如何だろうか。きっと、今も、校歌を口ずさみながら、たおやかな八溝の山並みや遠く離れた故里に、思いをいたしているのではないでしょうか。

二、「校歌」に歌われた八溝山 (\*漢数字は歌の番号)

一、 嶽をとれ 大地を踏みて起ち上れ

八溝の山の雪消えて

(大子第一高等学校)

一、 八溝山河に水受けて 久慈の流れは永遠に

(大子第一高等学校応援歌)

二、 風全山に満つる八溝嶺 久慈川の瀬に水音鳴りて

(大子第一高等学校)

一、 青空はるか八溝山 朝日に染えて澄むところ

(大子中学校)

一、 八溝の峯の白雲に 高き希望の夢をのせ

(旧大子中学校)

一、 青空たかくそびえたつ 八溝の山にわく雲が

(浅川小学校)

一、 高笹の山 嶺秀いで 八溝の川の水清く

(黒沢小学校) (上野宮小学校)

一、 緑に萌ゆる城山の 八溝の嶺は天をつく

(依上中学校)

二、 空晴れる八溝の峰に 若い腕くんで友がいる友がいる

(大子西中学校)

一、青雲なびく八溝嶺の 永遠なる姿望みつ

(黒沢中学校)

二、八溝おろしの吹く日にも みずから強くきたえま

(矢田小学校)

二、八溝のやまなみゆるぎなく とわにさかえる

窓もさやかに (黒羽町立黒羽小学校)

二、八溝の山や那須山の 高きにまさる我等の希望

(黒羽町立片田小学校)

一、八溝の山にさしのぼる 朝日をうけて我等の母校

(黒羽町立北野上小学校)

一、ま白き雲のたなびける 八溝山なみあおぎつつ

(黒羽町立須賀川小学校)

一、八溝の山のふところに 希望と共にいだかれて

(黒羽町立須佐木小学校)

一、八溝の山の霧晴れて 鶯の鳴くさわやかさ

(黒羽町立川上小学校)

一、八溝の山の谷深く 清き流れの武茂川や

(黒羽町立川上小学校旧歌)

一、青い空からほほえみかける

八溝の山のふところに (黒羽町立両郷中央小学校)

二、黄金花咲く八溝山 山なみめぐる我が村は

(黒羽町立両郷中央小学校旧歌)

一、雲なびく八溝の峰の 遠く気高き理想に燃えて

(黒羽町立須賀川中学校)

二、みよ八溝山ほほえみて 鶉黒をたとう那須の野は

(黒羽町立両郷中学校)

一、仰ぐ八溝につづく嶺 もゆる緑よ朝の陽よ

(黒羽町立両郷東小学校)

一、八溝嶺の鎮む国原 古の聖の心

(栃木県立黒羽高等学校)

一、気もさわやかに澄みわたり 小鳥も歌う山のふるさと  
仰ぐ八溝に 陽も映えて

(馬頭町立馬頭小学校)

一、遥かなる八溝の山に たなびける雲美しく

(馬頭町立大山田上郷小学校)

一、はるか八溝の山脈青く 理想の光 仰ぎ見る

(馬頭町立大山田中学校)

一、八溝の山の霧さえて 学びの窓に朝が来る

(馬頭町立小口小学校)

三、おわりに

八溝山と「校歌」について調べてみて気づいたことは、山麓の茨城県大子町よりも、むしろ栃木県那須郡、とくに黒羽町に多いのに驚きました。

黒羽町の小中高のほとんどの学校の校歌に、「八溝山」が歌われています。八溝山は、おらが地元の大子町の山とばかり思っていました。八溝山麓の村々にとっては、大子も栃木も福島もなく、「おらが地元」の山として歌われています。

福島県天祭町の小中学校の校歌には「八溝山」は出てきません。棚倉町、塙町、黒磯市、大田原市などではどうでしょうか。ご教示願えれば幸甚です。

最後に、これら紹介した学校の中には、統廃合により多くの学校が姿を消していききましたが、懐かしい学び舎の原風景と校歌は、卒業生の心いつまでも生きていることをつけ加えておきます。

(大子町立下野宮小学校)

## ランプから電灯へ(二)

―未点灯集落解消への取り組み―

電気が供給されない、いわゆる未点灯集落は、どれほどの拡がりをもつて存在したのであるか。茨城県の実情を検討してみよう。

本誌前号で述べたように、一九五二年十二月に農山漁村電気導入促進法が制定されてからは、それまでの行政措置という形ではなく法的な根拠をもって未点灯集落解消への取り組みが展開されることになった。その法が制定されて間もない頃、「いはらき」新聞は次のように伝えている。「県下でまだ電燈のつかない」光のない部落は二万戸以上に上り芳しからぬ関東第一の汚名をきている」と(五三年一月十四日付)。また五六年一月一日付の同紙には、「日本一の汚名を返上」との記述もある。関東一か日本一かはともあれ、未点灯家屋の多さでは茨城県は全国でも有数の地帯であったことは確かであろう。

法の制定を受けて茨城県は、対策を検討する前提として、まず一九五三年度に未点灯集落の実態調査を行った。その調査結果をまとめたものが、『電気導入に関する基礎調査―未点灯部落の実態とその対策』(一九五四年三月)である。当報告書には五三年五月末時点の数値が盛り込まれ、当時三六三市町村中三三三市町村(三〇町村は未報告)についての実情が詳らかにされている。

当報告書によって、実情の一端を紹介しよう。未点灯戸数は二万一二八六戸、一〇戸以上の集団未点灯集落は四五五集落、戸数にして九四三九戸を数えている。総戸数に占める未点灯戸数の割合は、七パーセントである。前述のように三〇町村分が

欠落しているので、実態はもっと多いとみてよからう。

郡別の分布を未点灯戸数の多い順に並べると、久慈郡(三〇五三戸)、那珂郡(二四三四戸)、東茨城郡(二二五三戸)、鹿島郡(二〇七一戸)、結城郡(一五九四戸)、西茨城郡(一五一五戸)、猿島郡(一四七〇戸)、稲敷郡(一四六四戸)、新治郡(一三九一戸)、行方郡(一二九〇戸)、真壁郡(一二七二戸)、多賀郡(六一六戸)、筑波郡(五〇四戸)、北相馬郡(三五九戸)となる。ただ、多賀郡の場合は一五町村中一一町村が未報告という状態であり、しかも山間地を多く含む地勢を考慮すると、実際にはかなり多くなり、より上位に位置するものと思われる。

こうした序列をみると、久慈郡の多さに改めて注目したい。三〇五三戸は県内の一四パーセントほどに相当する数字であるほか、同郡内の総戸数に対しても約一パーセントに及ぶもので、この面でも他郡を引き離している。集団未点灯集落の数においても久慈郡は七〇集落でもっとも多く、もちろん一五二七戸という戸数も県内最大である。未点灯家屋が単に点在していただけでなく、集落という面的に拡がった形でも多数存在していたことがわかる。山間地という厳しい自然条件、採算に合わないが故の電力会社の消極姿勢、配電が可能であったとしても導入を妨げる多額の工事費負担、負担に耐えられない家計状況、等々の要因が重なり合って生まれた久慈郡の状況であろう。

この実態調査では、市町村の意見や希望についても問うているが、それに応えた一八〇町村のうち一〇〇町村が資金の斡旋や経費の軽減を指摘している。例えば、「資金斡旋により点灯の促進を希望(袋田村)」、「経済的事情により点灯出来ない(坏村)」といった具合である。未点灯問題を解決するうえでの最大の隘路は、資金の調達であった。だが、この隘路への対策がとられようになるにはもう数年待たねばならなかった。(斎藤)

## 奥久慈の木地師 (一)

鈴木三郎

木地師の奥久慈地方入山は二度あり、初回は水戸藩が招聘した寛延四年(一七五二)年で、このときはわずか三年で挫折、終止符を打っている。

二度目は天保八(一八三七)年で、このときは大飢饉のため、会津藩が木地師の他藩への流出を認めた時期である。

### ◆初回の奥久慈入山始末

「家世実紀」なる書物の宝暦二年七月の条に「会津藩内の木地師(塗師を含む)一行が宝暦元年春、水戸領へ出稼ぎに行き引き戻された・・・と見える。要約すると大石組郷頭、中丸惣左衛門が若松の塗師を引き連れ、水戸藩領へ出稼ぎに行くべく画策したが、策謀が事前に洩れて失敗した。惣右衛門は諦めずに喜多方の塗師を誘い出し、水戸領入りを成功させたものの、再び会津奉行の耳に入り、連れ戻されることとなった。しかしこの時惣左衛門は戻らなかった。

そうこうするうちに、水戸藩より逆に惣左衛門を召し抱えたいとの申し出があった。当時御三家の一つである水戸藩からの申し出で、会津藩は対応に腐心したが、結局は水戸藩の意を受け入れたのである。

このようにして会津木地師の獲得に成功した水戸藩は、塗師を水戸城下に住まいさせ、木地師を奥久慈八溝山に入山させて、そこで挽いた製品を水戸で仕上げる方法を探った。

『常陸国北郡里程間敷之記』には、「寛延四末、上の宮御立

山吟味役宮本長五郎掛ニテ、木地挽取立、会津表より職人呼び細工為致候所宝暦三西十一月止ル」とある。

当時の会津藩は、漆器は重要国産物として扱っていたため、その担い手である木地師に対して他国流出を禁止する掟を制定し、引き戻しの理由とした。「当領の掟、木地師二而も願出免許無之候而者他へ不差出儀ニ候処、斯ル処し方難捨置引戻候ニ付尋之者差出候」などの文言も見られ、藩の面目にかけて連れ戻したことがうかがわれる。

水戸藩は会津藩とこのような駆け引きまでして獲得した漆器生産の事業を僅か三年で廃止している。その理由は明らかではないが、強引に召し抱えた中村惣左衛門も早々帰藩しているらしいから、何等かの理由により極端な不採算事業となり挫折したのかもしれない。

### ◆木地師の第二次奥久慈入山

木地師の八溝山第二次入山は天保八年で、さきに水戸藩が導入するも、功を奏しなかった。宝暦三年から数えて約八十年後のことである。

このときは、東北地方が、いわゆる天保の飢饉に襲われ、会津地方も木地師、農民共に大困窮に陥った。会津藩はこの打開策として木地師の他国流出を認めたものとも思われる。

自由を得た木地師達は、他藩の深山とその山麓の有力者を求めて諸国に散行した。黒澤郷に木地師が流れた来たのは、天保八四年で、「菊池家文書」によると、最初は上の宮村庄屋彦兵衛を尋ね、この土地で生地生産開業を訴えたので、彦兵

衛は隣接する中郷村の庄治右衛門を紹介した。庄治右衛門は菊池姓、庄屋も勤めたこともある有力農家で、常々八溝山の優良木を資材として木地漆器製造をとの思いがあったのだろう。世話役を引き受けることとし、更に会津から塗師等を招き寄せて塗座元としてこの事業に取り組んだものの如くである。八溝山一帯は水戸の御立山であり、立木伐採については許可が必要ではあったが、この企画に水戸藩は直接の係わりあいを持たなかったようである。

木地漆器生産事業の実行には、座元の世話役をはじめ、職種も多様（専門化していた）で多くの職人を必要とした。いわく木地挽師、木そげ師、塗師、生板指物師、はては道具製造修繕のための鍛冶師まで、これらを包含するとかかりの人数になる。天保十二年、座元庄治衛門差し出しの文書を見ると座元家だけでも十八人、職人、家内人を加えると四十六人になる。まとめて一家族的に扱ったとしたら、それこそ超大家族、小集落を形成できる程の人数だから宿舎の整備だけでも至難の業だったと思われる。

菊池家は豪農で宅地面積千二百坪（現在も維持している）その周辺にも農地を所有していたし、出入り門を内蔵した長屋住宅なども構えていたから、今で言う社宅方式もとれて、職人の収容も可能だったのだろう。

当時を思わせるものとしては、現住宅左側奥に建てられてあった製品倉庫の土台礎石が残っており、昭和五十年代まで存在したという木地倉（塗装作業舎）の跡地も明らかである。

（続く）

#### 【編集後記】

ほない歴史通信の第二十五号をお届けします。春夏秋冬と年四回の発行で七年目に入りました。これもひとえにこの手作りのミニコミ季刊誌を心待ちにしている読者の皆様の支持があればこそと編集人一同感謝しています。

特に今回は三名のゲスト執筆者を迎えることができました。今までに何回かの寄稿して頂いてる大森政夫さん、飯村尋道さんには長年にわたつての調査研究の一端を披瀝していただきました。また今回初寄稿の鈴木三郎さんにはライフワークにしている八溝山と八溝川の関わりの中で、一般には殆ど知られていなかったテーマを発表していただきました。三編とも読んでいても興味深いものがありました。今後折々には寄稿して頂けるものと大いに期待しております。

どうぞ編集人と読者のこの期待を裏切らないように健康に留意されて末永く活躍して下さいを希望して止みません。

（吉成）

編集人 斎藤典生（茨城大学人文学部）

野内正美（茨城県立歴史館）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圀彦（太子町教育長）

吉成 英文（太子町社会教育課）

井上 和司（太子町税務課）

編集発行 遊 中 文 の △ 云

太子町立中央公民館歴史資料室気付

久慈郡太子町大字池田二六六九番地

☎三九一三五

☎〇五七二一六モ